



用途様々 最適なキャップを

「日本クロージャー 平塚工場」（平塚市長瀬）は、ペットボトルなどで使われるキャップを専門に製造している。日々当たり前のように手にするキャップには様々な種類があり、開発には日本の技術の粋が集集されているという。小川武巳工場長（54）に、そんな製造の舞台裏について聞いた。

——平塚工場ではどのようなキャップを製造しているのか。
 飲料用ペットボトルを始め、ジャムやサケフレークなどの瓶、油容器、ゼリー飲料のパウチなどキャップの種類は多岐に及びます。
 平塚工場は、原材料を輸入する横浜港に近く、高速道路

日本クロージャー 平塚工場(平塚市)

小川 武巳 工場長 54



1995年に日本クロージャーに入社。最初の配属は茨城県の石岡工場で、その後は、本社で各メーカーの商品に合うキャップの締め具合を提案するなどの業務に従事した。2014年からはインドネシアの工場設立に携わり、24年から平塚工場長を務める。

など物流網にも恵まれていまま、2023年度は関東地域を中心として、全社全体として、全

1941年(昭和16年)、「王冠」と呼ばれる瓶の蓋の製造会社として創業。交通網の発達などから64年に工場が東京・品川から平塚工場に移転

し、90年代からペットボトルのキャップ作りに注力し始めた。2010年、14年に工場を建て替え、昨年度は年間56億個のキャップを製造した。

国の飲料用ペットボトルの半数以上のシェア(占有率、昨年度)を誇ります。

——商品ごとに様々な工夫が施されている。

飲料用ペットボトルのキャップだけでも、用途によって41種類あります。冷蔵用と加温用でも異なり、加温用は高温の保管庫でも耐えられるように設計しています。

軟らかく、薄い材質のペットボトルを硬くするため、飲料に窒素を充填する商品もあります。キャップに圧がかかるので、耐えられる設計にしなければなりません。「強炭酸」の飲料も密封性を保つ必要があります、かつ、開栓した時の気持ちいい音も維持したいところです。

まさにペットボトルのキャップには「密封性」と「開けやすさ」の相反する性能が求められるのです。そのため、キャップ内側の溝の深さや形状などを細かく調節し、最適解を見いださなければなりません。世の中の良い商品をお届けたいメーカー側の要望に応えるため、日々試行錯誤しています。

——近年力を入れていることは。

プラスチックを扱う会社として、使用済みキャップのリサイクルに向けた研究開発に取り組んでいます。二酸化炭素(CO₂)の削減も目指し、石油由来のキャップを軽量化しました。燃やしたときに石油由来よりも大気中のCO₂を増やさないバイオマス材料を配合したキャップも提供しています。これからも消費者と地球環境に貢献する企業であり続けたいです。

(聞き手・佐藤官弘)

かながわ 経済